

## II

### 排除と統合

近代ラテンアメリカ都市のエリートと民衆

路上の物売りたち（部分図）。左から果物、ろうそく、菓子を買っている（C. Gray, 1866）



はじめに

鬱蒼と茂る熱帯雨林（アマゾン）、万年雪を抱く山々（アンデス）、広大な草原（パンパ）――。

ラテンアメリカと聞いてまず頭に浮かんでくるのが、これら大自然とそこに暮らす人びとの姿ではあるまいか。だが現在のラテンアメリカ社会を基本的特徴づけているのは都市である。

一九九〇年現在、ラテンアメリカ全人口の七割以上が人口二万人以上の都市に住んでいる。なかでもアルゼンチン、チリでは八割以上が、ベネズエラにいたってはじつに人口の九割以上が都市住民である。メキシコ市は人口二〇〇〇万人以上を数える世界最大の都市であり、サンパウロ

(二七〇万人)、ブエノスアイレス(二一〇〇万人)、リオデジャネイロ(二〇〇〇万人)とあわせて、世界の一〇大都市のうち四都市までがラテンアメリカの都市である。

ラテンアメリカの都市はきわめて多様である。ヨーロッパを思わせる街並みを白い肌の男女が行きかうアルゼンチンの首都ブエノスアイレス、どんよりとした曇空のもとインディオの顔立ちの物売りであふれるペルーの首都リマ、青い空と明るい日光のなか、白・褐色・黒などさまざまな肌の人びとが往来するブラジルのリオデジャネイロ、高層ビル群のあいだをハイウェイが縦横に走るベネズエラの首都カラカス、赤い屋根と白い壁の建物が植民地時代の雰囲気漂わせるエクスアドルの首都キト、標高三六〇〇mの高原にすり鉢状に広がるボリビアの首都ラパスなど、地勢や気候などの自然条件の点でも、街路や建築物が形づくる都市景観の点でも、往来する人びとの肌の色においても、ラテンアメリカの都市はじつにさまざまである。

だが、どの都市にも例外なく共通した一つの顔がある。それは極端な貧富の格差である。

チリの首都サンティアゴの周辺部には、北、西、南の方向に、ポブラシオンと呼ばれる下層民の居住地区がまるで茶色のシミのように広がっている。ガラス張りの高層ビルが立ち並ぶ都心からバスで南に下っていくと、窓から見える街の情景はしだいに変化していく。建物の背丈は低くなり、土色をした貧しい街並みにかわる。ポブラシオンに入ると貧しさはいっそうつづる。バスが走る表通りこそ舗装されているものの、いったん横丁に入るともう舗装はない。穴ぼこだらけの道は、乾季の夏には土埃が舞い、雨が降りつづく冬は文字どおり泥沼となる。道の両側には、不揃いの板塀で囲われた板張りの粗末な家々が立ち並ぶ。緑はほとんどない。道も家も塀も、な

にもかもが茶褐色の世界だ。

市の北東部の高台に広がる高級住宅地「バリオ・アルト」(山の手)は、これとはまったくの別世界である。NGOで活動している友人のペロニカがある日、われわれ家族四人をドライブに誘ってくれた。彼女が連れていってくれたのは、バリオ・アルトのなかでもとびきりの超高級住宅地だった。

一年を通じて灰褐色のスモッグに覆われたサンティアゴの街だが、アンデス山麓のこのあたりは細長い籐のようなポブラが空高く伸び、田園の雰囲気がいまだ残っていて、空気もしつとりと湿っている。広い道路は行きかう車も少なく、手入れの行きとどいた芝生や生垣に縁取られた幅広い歩道にも人影はほとんど見られない。街路樹が植えられた道路に沿って、高い塀をめぐらせた広大な敷地の豪邸がつつく。何台もの高級車が収まっているのだろう大きなガレージ。威風堂々とした門構え。高い塀と樹木越しに、さまざまな意匠を凝らした豪華な邸宅が垣間見える。

ペロニカが言う。「どう、わかるでしょ？ こうした生活を守るためなら連中はどんなことでもやるだろうってことが」。

一九七〇年九月、社会主義を旗印に掲げた人民連合のアジエンデが大統領選挙に勝利したとき、バリオ・アルトは恐慌状態に陥った。豪邸を売り払い一家をあげて国外に脱出する者も少なくなかった。アジエンデ政権が大企業を国有化と、農地改革による大農場接収に着手すると、恐怖は憎悪にかわった。

富裕層にとって、アジエンデ政権は「ロト」の政府だった。ロトとは「ボロをまとった貧しく

不潔で性悪のごろつき」といった意味合いの、下層民を指すチリ特有の侮蔑語である。無教養で飲んだくれのロトどもがコミュニストたちに焚きつけられ、工場や農場や土地を占拠し、自分たちがこれまで営々と築き上げてきた富を横領している。反アジェンデ派は、蔑みと憎しみをこめて人民連合派を「ウペリエント」(upeliento)と呼んだ。ウペリエントとは、人民連合 (Unidad Popular) の略称「ウーペー」(UP)に、ロトを意味する「ペリエント」(pelinto)を付加してつくられた造語である。「ロト」よりも「ペリエント」のほうが嫌悪と軽蔑の度合いが一段と強い。

一九七三年九月、軍がクーデターでアジェンデ政権を打倒しウペリエントたちを始末してくれたとき、富裕層はこれをシャンペンで祝った。以後一七年におよぶ軍政のもとで、バリオ・アルトとポブラシオンの距離はいっそう広がった。事情は、民政移管を果たした現在にあっても基本的にかわらない。サンティアゴはその内部に二種類のまったく異質の空間を抱えこんだままである。

本章では、南米チリの首都サンティアゴの都市エリートと都市下層民のあいだの関係について、一九世紀初頭の独立以後から二〇世紀初頭にかけての時期を中心に検討する。チリをふくめラテンアメリカ諸国の都市における富と貧困についてはこれまでも多くの研究が存在するが、そのほとんどは第二次世界大戦以降を対象としたものである。たしかに、農村からの大量の人口流入によって都市人口が激増し都市における貧困が拡大したのは第二次世界大戦以後のことである。しかし同様な現象は、規模こそ異なるものすので一九世紀に見られた。というより、貧困やスラムなど今日のラテンアメリカ都市が抱えている問題は一九世紀にまでさかのぼるといったほう

が正確だろう。現在のラテンアメリカ都市社会の秩序は一九世紀中葉から二〇世紀初頭にかけての時期にその原型が形成されたといつてよいのである。

本稿で取り上げるのはあくまでもサンティアゴ一都市の事例にかぎられる。しかし、そこで見られた問題群は他のラテンアメリカ諸国においても多かれ少なかれ共通していた。これまであまり論じられることがなかった一九世紀の都市社会について検討するなかで、従来とはいささか異なったラテンアメリカ近代史像が浮かび上がってくることもなるだろう。

## 1

## サルミエントのサンティアゴ論 「一九世紀前半のサンティアゴ」

一九世紀初頭の独立後、大半のラテンアメリカ諸国が政治的混乱と内戦に明け暮れていたなかで、ひとりチリだけは早期に政治的安定を実現し、強力な中央集権政府のもとで経済的な繁栄を実現した。鉱山業や農業の発展は、大地主・大商人・鉱山主・銀行家など富裕層が集まり住む首都サンティアゴの成長をうながした。一八四〇年代のサンティアゴの変貌ぶりについては、一九世紀アルゼンチンを代表する思想家・政治家であるサルミエントが貴重な証言を残してくれている。

当時アルゼンチンを支配していた独裁者ロサスの迫害から逃れチリで亡命生活を送っていたサルミエントは、サンティアゴで最初の新聞「プログレン」紙を創刊し、数多くの評論を執筆発表した。一八四二年に同紙に掲載された「サンティアゴ」と題される評論もそのひとつで、当時のサンティアゴ

市の急速な成長ぶりをつぎのように描いている。

「まず第一に注意を引くのは、市の領域が驚くほど拡大しつつあり、人口が急速に増大し、建造物が日に日に新しくなり、生活習慣が豊かになり、手工業が栄えて、その製品が多くの部門でたんに市の需要のみならず共和国全体の需要を満たしていることである。サンティアゴの人口増加はこのところいつそう急速になっており、そのことは、以前には存在しなかった家々、通り、地区が短期間に増加していることに容易に見てとれる。町のいたるところでこうした人口の激増ぶりが目につく。チンバ「市の北部地区」は拡大し、今日では都市周辺部一帯にワングリエスと呼ばれる掘立小屋（ランチョ）群があつて、数多くの小屋や路地が見られる」（Sarmiento, 1932）。

これにつづけてサルミエントは言う。人口が急増し一見サンティアゴは発展しているように見える。しかしこうした事態は「善どころか悪である」。もしもいまからならかの対策を講じなければ「やがてきわめて忌まわしい結果を引き起こしかねない」。市の人口増大は主として地方からの人口流入によるものである。ではなぜ人口が流入しているのか。それはサンティアゴ市で大規模な経済活動が発展しているからではない。サンティアゴには大量の労働力を必要とする工場はまだ存在しないし、商業活動も市の中心部に限定されている。人口流入の主たる原因は地方の経済的な停滞である。

地方では土地はすべて占有されている。また工場も存在しない。その結果、仕事がなく将来への展望ももてない人びとが多数存在している。土地をもっている場合でも、土地が狭ければ将来子どもたち全員がその土地で生活していくことは不可能である。その「必然的な結果は、生手手段の欠如と労働力の過剰」である。働き口のないこれらの人びとの目にサンティアゴはきわめて魅力的に映る。そ

ここでは多数の人びとが集まり住んでおり、さまざまな需要があるだろう。ちよつとした仕事なら簡単に見つかり、なんとか生活していくことができるだろう。生活に必要な物資も安いに違いない。さらにまた、大都市の輝きはそれだけで魅力的な存在である。こうして「現在の貧しい状況と、そうした状況を改善する希望をもてないがゆえに、若者たちは魅惑的な都市へと引きつけられていく」のである。ちよつと「のどの渇きにさいなまれる者が、渇きをいやしてくれる泉に引きつけられるように」。

農村での過剰人口が「プッシュ要因」として、都市の魅力が「プル要因」として働き、農村から都市へと人口が流入する。見てのとおり、ここには現在の都市化をめぐる議論がすでに先取りされるかたちで提示されている。

サンティアゴには、弁護士、医師、職人、商人から日雇労働者にいたるまであらゆる階層の人びとが流入してくる。しかしもつとも多いのは貧しい人びとである。都心部から離れた場所に建設されているのはこれら下層民のための賃貸住宅であり、「新しく誕生している居住区の住民はすべて貧民である」。これら貧しい下層民たちは生活していくために創意を働かせてさまざまな仕事を自ら創り出す。

「サンティアゴには、モテ（外皮を取り除いた小麦粒）を売る三〇〇人の屈強な男がいる。ウエシージョ（砂糖水に浸けた乾燥桃の芯）を売る三〇〇人の男が、果物を売る二〇〇〇人の男が、一足の靴を売る一〇〇〇人の男がいる。こんな仕事で生活手段が得られるのかと人が見て驚くような仕事に就いて暮らしている何千という健康な男たちがいるのである。このように、サンティアゴには、その日の生活をやつと支えるだけの生活手段しかもたない男たちが、下層階級のあいだに限っても一見したただけでも少なくとも一万人はいる。未来も希望もない何千人という男たちである。仕事がなく、本来

は女子どもの仕事にいたずらに就いているのである」(Sarmiento, 1842)。

都市経済が十分な雇用を保障しないがゆえに自ら雇用を創出する。現代の経済学者ならば「インフオーマル経済」と呼ぶであろう現象である。

このように、大土地所有制に起因する農村の過剰人口と都市への人口流出、都市における工業の未発展と不完全就業者の集積、都市周辺部における下層民居住地区の形成・拡大など、やがてラテンアメリカの都市を特徴づけることになる現象を、すでに一九世紀前半の時点でサルミエントは的確に把握していた。

下層民の増大は当時の都市エリートのあいだに危惧を生んだ。たとえば当時のサンティアゴ州知事デ・ラ・バラは、大統領への年次報告書(一八四六年)のなかで、サンティアゴ市に下層民が集積することによって「犯罪者の数が増大し、州当局は彼らによる犯罪行為の予防と取り締まりのために格別努力することが必要となっている」と述べている(De la Barra, 1846, p. 4)。また一八四八年には、市の一定区域内での掘立小屋(ランチョと呼ばれる)の建設を禁じる市条例が出されている。市内に下層民が居住することを制限しようとしたのである。だが一九世紀前半期において、これらの危惧はいまだ強い危機感にまではいたっていない。

それというのも、明確な階級区分にもかかわらず、当時の都市エリートと下層民は共通の世界をいまだ共有していたからである。一八二〇年代初頭にチリに滞在し詳細な日記を残しているイギリス人のグラハム夫人は、チリ人の知人に連れられてサンティアゴ市南西部の野原にある下層民の安酒場(チンガーナ)に出かけたときの経験をつぎのように描いている。

「民衆は女も子どももチンガーナが大好きである。徒歩や馬や二輪馬車や荷車で行きかう人びとで野原はいっぱいである。上流階級はアラメダ通りのほうがお好みだが、それでもチンガーナにもかからずやってきて、平安で秩序正しくも陽気な雰囲気なかでみな同様に満足しているように見える。イギリスであったならこれほど多くの人びとが集まれば混乱や喧嘩がかならず起きると思うが、ここでは大いに楽しみ、少なからぬ酒を飲んでもそうしたことはなかった」(Graham, 1988, p. 111)。

このように上流階級の人びとも安酒場で下層民に混じって酒を飲んで楽しんだし、あるいはまた闘鶏、闘牛などの娯楽の場や、降誕祭、独立記念祭などの祝祭の場でもその楽しみを共有していた。だがこうした状況はしだいに変化していった。チリの経済発展にもなつて上流階級の富裕化とヨーロッパ化が進んだからである。そして一八七〇年代にもなれば、上流階級と下層民のあいだの距離はもはや決定的に離れていた。

## 2

### ビクニーヤ・マケナのサンティアゴ改造計画 [一九世紀後半のサンティアゴ]

一八七〇年代、都市下層民に対するエリートの視線は大きく変化していた。

たとえば一八七二年、サンティアゴの有力紙「エル・フェロカルル」紙に掲載された論説を見てみよう。論説はその冒頭で「わが国の労働階級の福利について真剣に考えるべきときである」と主張する。近年チリは急速な経済発展をとげてきた。それによって得た富で富裕階級は「豪華な邸宅、馬車、

大理石、ブロンズ、絵画、タペストリーを買い漁り、贅沢な生活を送っている。だがその一方で労働階級は貧窮状態にある。事態はきわめて憂慮すべき状況にある、と同紙はいう。経済発展によってサンティアゴには「富とともに貧困も流入している」からである。サンティアゴの人口が二〇万人、三〇万人と膨れ上がったときには、少なくとも一〇万人の貧民を抱えこむことになる。そうならば、サンティアゴは、飢えた者たちの群れによってさらなる脅威にさらされることになるだろう。これは野蛮人の新たな侵入であり、先見の明なきすべての文明に対する闘である。そして同紙はこう結論していた。「そうであるがゆえにわれわれは貧民地区の再建を主張するものである」(El Ferrocarril 一八七二年四月二八日)。

見てのとおり、ここには、増大する都市下層民に脅威を感じるエリート層の危機感がきわめて素直に表明されている。「文明」を守るために「野蛮人の新たな侵入」に対して対策を講じなければならぬ。

実際のところ、一八三〇年には約六万五〇〇〇人だったサンティアゴ市の人口は七五年には一五万人へと倍増し、それにもなつて市の周辺部にはいまや広大な貧民地区が形成されていた。トルネロ著「チリ図解」(一八七二年)によれば、当時のサンティアゴ市は北部、中部、南部の三つの区域にはつきりと区分されていた。

元来、サンティアゴの中心となつてきたのは中部地区である。そこでは碁盤目状に走る道路で街は整然と区切られ、中央広場を中心に主要な公共機関の建物や名望家の邸宅が集中していた。これに対して北部地区と南部地区はもともと墓地、精神病院、屠殺場、兵営、刑務所、修道院などが置かれた

周辺地区であったが、そこに大規模な下層民の居住地区が形成されていた。「北部地区と南部地区には、まっすぐな、あるいは曲がりくねった通りや路地に無数の小屋がびっしりと立ち並ぶ広大な周辺地区が広がっている。そこにはたいがいきわめて貧しいおびただしい数の民衆が住んでいる」という状況だった(Tornero, 1872, pp. 7-8)。

「エル・フェロカール」紙の主張した「貧民地区の再建」に積極的にとりくんだのが、一八七二年四月サンティアゴ州知事に任命されたビクレーニャ・マケナである。

知事への就任演説で、ビクレーニャ・マケナは自らのサンティアゴ改造計画を発表した。サンティアゴ市は「危機に瀕している」と彼は断言する。しばらく前まで、サンティアゴ市は、日干し煉瓦の建物がつづく、古い植民地時代の空気を保持したこぢんまりとした都市だった。だが、現在、市は周辺地域へ大きく拡大しつつあり、また新たな建造物がつきつぎに建てられてその容貌を急速に変えつつある。にもかかわらず、都市設備の面で市は植民地時代から受け継いだ体制をいまだ維持しており、急激に変化する現実に対応しきれない。それゆえに、都市改造を通じてサンティアゴを近代的な都市へとつくり変えていくことが急務である。自分が知事の職務を引き受けたのも古いサンティアゴを新しい都市へと改造するためなのだ。数時間にわたる就任演説をビクレーニャ・マケナはこう結んでいた。「サンティアゴをアメリカのパリに変えようではないか」(Vicuña Mackenna, 1873, p. 39)。

ビクレーニャ・マケナのサンティアゴ改造計画は、ナポレオン三世治下のフランスでオスマン知事が推進した大規模なパリ改造計画をモデルに、道路の拡張・建設や公園・遊歩道の拡充、上下水道の整備、公設市場の改造など広範囲にわたって都市設備の拡充をめざす大規模なものだった。だが注意す

べきは、彼の改造構想には、「危険な階級」としての都市下層民の存在が強烈に意識されていたことである。

ビクーニヤ・マケナはサンティアゴ市が二つの部分からなっているとす。一つは「本来の都市部」、あるいは「本来のサンティアゴ」と呼べる部分であり、市の正式な構成員たる「市民」が居住、生活、活動している地区である。そこは「文明化され、豊かで、キリスト教的な都市部」である。だが他方でもうひとつのサンティアゴが存在している。それは、「本来の都市部」の外に広がる「市外区」(suburbios)である。そこは下層民が住む野蛮で不潔な地区であり、都市下層民の住宅である粗末な掘立小屋(ランチョ)と、彼らがたむろする安酒場(チンガーナ)が密集している。ランチョは「インディオの住宅」そのままの不潔な住宅であり、「野蛮のシンボル」である。そしてまた、チンガーナは酔った下層民たちが乱痴騒ぎをくりひろげる「悪徳」の巣である。このランチョとチンガーナのひしめく「市外区」、そこは「汚染、悪徳、犯罪、害毒の巨大な排泄溝であり、文字どおりの死の土地」なのである (Vicuña Mackenna 1872, pp. 18, 24-25)。

この「市外区」は「本来の都市部」の安全を脅かすきわめて危険な存在である。

まず第一に、そこは凶悪犯罪の多発地である。「サンティアゴの境界区域では、向こう見ずな犯罪が何の咎めだでも受けずに頻発している」のである。第二に、この周辺地区は汚染や病気の発生源となる。木造のランチョは「つねに火事の危険」だけでなく、その不潔さゆえに「汚染や病気の源」である。このように危険で野蛮な「市外区」を文明的な「本来の都市部」からいかに切り離し、「本来の都市部」の安全を確保していくか。ビクーニヤ・マケナのサンティアゴ改造計画を貫く基本的な関心の

ひとつがここにあった。

そうした関心から彼が構想したのが環状道路の建設である。「本来の都市部」をぐるりと取り囲む環状道路を建設することによって、彼は二つの地区を空間的に明確に区分・分離しようとしたのである。両地区のあいだにはつきりと目に見える区分線を引き、都市行政上においても両地区を差別する。環状道路内側の「本来の都市部」には、舗装、歩道、植樹、街灯、治安、飲料水など都市設備を充実させ、外側の「市外区」にはより安上がりな別個の体制をあてる。これにより市当局の財政負担を軽減、合理化できるであろう。また環状道路の建設によって、「本来の都市部」における道路の混雑も緩和されるであろう。だがそれ以上に、環状道路に期待されていたのは、文明化された「本来の都市部」を野蛮な「市外区」から防衛する役割である。

貧民地区の存在はさまざまな点で「本来の都市部」に対する「脅威」と感じられていた。そうした脅威のなかでもビクーニヤ・マケナにとって最大の関心事だったのが伝染病である。じつは、彼の都市改造構想全体が「衛生」の観点で貫かれていたとさえいってよい。上下水道、食品市場、屠殺場、病院の整備など、彼の掲げた主要政策が衛生と関連していたことは一見して明らかだが、衛生問題とは一見無関係に見える政策においても、その背後には衛生への関心が潜んでいた。たとえば、市の中央部を横切って流れるマポチョ川の護岸工事についても、たんに水害防止のためだけではなく、水門を設けて水量を調節することにより川岸に堆積しているごみ押し流す効用が考えられていたし、道路の舗装事業も、交通上の観点からだけでなく、未舗装の道路は土埃りが舞い上がり汚水が溜まるがゆえに不衛生であると考えられたからでもあった。

そうした衛生への関心は、環状道路の建設計画においてひととき強かった。環状道路によって「居住地区の周囲に一種の防疫線がしかれることになり、植樹によって、貧民街の疫病の影響を防ぐ」とができるからである。さらに、有害な物資を撤き散らす可能性のある工場や施設を環状道路の内側に設立することを禁止し、道路の外側にのみ建設を許可することで、住宅地区を汚染から守ることもできる。またすでに環状道路の内側に存在しているランチョや工場は撤去して環状道路の外側に移す。火事や疫病の発生源となりやすいランチョは「文化的な市部全体の外に出て、キリスト教的で文明化された人間の住宅に場所を譲る」のでなければならぬ (Vicuña Mackenna 1872, pp. 18-19)。

一九世紀ラテンアメリカの政治家、知識人の一人として、ビクーニャ・マケナもまた「文明と野蛮」をその思考の枠組みとし、「野蛮」を克服して「文明化」「西欧化」を実現することこそが自国の進むべき道であると考えていた。「文明化され、豊かで、キリスト教的な都市部」を野蛮な下層民居住地区の「汚染、悪徳、犯罪、害毒」から防衛しようとした彼のサンティアゴ改造計画もその一環であった。こうした発想を貫くエリートの性格についてはあらためて指摘するまでもなからう。しかし、だからといって、ビクーニャ・マケナが反民衆的なエリートの典型だったということとはできない。

当時の政治家、知識人全体のなかに位置づけたとき、ビクーニャ・マケナの思想と行動はむしろ進歩的であったといつてよい。青年時代、彼は、急進的な自由主義派知識人が職人と手を組んで結成した政治団体「平等協会」の中心的メンバーだったし、一八五一年、当時の保守派政府に対して自由主義派が武装蜂起したさいにも自ら武器を取って戦った。一八七二年から七五年にかけてサンティアゴ州知事を務めたあと、彼は七六年の大統領選に立候補するが、彼を後押ししたのは「労働者階級」だ

った。「労働者階級の友」、これがビクーニャ・マケナに与えられた称号だったのである (Orrego Vicuña, 1951, p. 317)。

下層民の「野蛮さ」に露骨な嫌悪感を示し、あのエリートのな観点に貫かれたサンティアゴ改造計画を打ち出したビクーニャ・マケナがなぜ「労働者階級の友」なのか。

「労働者階級」(clase obrera)、あるいは「労働者」(obrerros)という用語には注意が必要である。「労働者」(obrero)なる名称は、現在では一般に労働現場で肉体労働に従事する賃金労働者を指す語である。しかし一九世紀から二〇世紀初頭にかけての時期、すなわち資本―賃労働を基軸とする資本主義的生産関係がまだ未成熟な段階にあって、「労働者」という語が意味していたのはなによりも職人のことであった。当時の都市民衆は大別して、この職人と、彼らより社会的地位の低い都市下層民の二つに分けることができる。都市下層民を主として構成していたのはペオン (peón) と呼ばれる未熟練労働者である。「労働者」(obrero)といたったとき、ふつうそのなかにペオンはふくまれない。労働者＝職人とペオンとのあいだには、都市社会のなかで占める位置においても、あるいはまたエリートが投げかける視線においても明確な違いが存在していた。ビクーニャ・マケナがその地位の向上と利益の擁護に努めたのは職人だったのであり、これに対して大半がペオンからなる都市下層民は侮蔑と差別の対象だったのである。



ペオン

ペオンという語が意味するものはラテンアメリカ各国で微妙に異なっている。だがチリにおいては、農村、都市を問わず、なんらの技術も専門性も定職もたず肉體労働や種々の雑業に従事する者を総称する語であった。また狹義ではとくに日雇労働者を指し、同様な意味の語であるガニヤン (ganán) とはほぼ無差別に用いられた。そして一九世紀のチリ社会において都市、農村を問わず最大多数を占めていたのが、この非熟練労働者ペオンだった。

ペオンの特徴はその移動性、流動性である。

農民反乱が頻発したメキシコなどと比較して、一九世紀チリの農村社会は地主と農民（インキリーノと呼ばれる小作人）からなるきわめて安定した静態的な社会であったとイメージされることが多い。だが、当時のチリ農村には、強固な地主—小作関係の外部に、これに組みこまれることなくきわめて流動的な状況にある多数のペオンが存在していた。彼らは一カ所に定住することなく、また恒常的で安定した雇用関係に入ることもなく、仕事を求めて農場から農場へ、あるいは農村から都市・鉱山へ、また逆に都市・鉱山から農村へと移動していた。それゆえ、当時、ペオンに言及する場合には、「移動ペオン」(peón ambulante)、「外部ペオン」(peón forastero)、「自由ペオン」(peón libre, peón suelto)、「浮浪ペオン」(peón vagabundo) など、さまざまな形容詞を付加して呼ぶことが多い。彼らは、資本主義の確立によって労働者階級が生まれる以前の、いわば未分化の原基状態にある労働者であり、やがて時代を下るにつれてある者は鉱山労働者として、ある者は都市の労働者・下層民として、ある者は農

村の零細農や季節労働者として定着化し定住化していくことになるのである。

農村の主要な労働力であったこのインキリーノとペオンについては、当時、きわめて対照的な見方が支配的であった。

一八七〇年代初頭、有名な鉄道王メイグスがペルーで鉄道建設工事を開始し、チリでも労働者を徵募すると、これに応じて多数のペオンがペルーに流出した。労働力不足と賃金高騰への危惧から流出の原因をめぐって新聞紙上で論争が起きたが、この論争のなかで、大地主の利益団体「全国農業協会」のベサニージャ会長はインキリーノとペオンについて興味深い比較を行っている。

ベサニージャによれば、ペルーに流出しているのはインキリーノではない。「インキリーノたちは、実直で働きの人びとであり、慎ましく、自分が生まれた土地に強い愛情をもっており、自分の小屋や畑のある場所を日に日に増大させ改善したいと願って休むことなく働いている。つねに雇い主に配慮し、その命じるところを忠実に履行し、生まれつき実直で、宗教を盲目的に敬って決しておろそかにしない」。だがペオンはこれとは対照的な存在である。彼らは「冒險的性格」をもち、「南から北へ、海から山脈へと歩きまわり」「住所不定で家庭もなく、ある日はこの農場で、次の日はあの農場で」、あるいは鉄道工事や用水路の開工工事などで働いている。カリフォルニアで金が発見されるとカリフォルニアへ、ペルーの硝石地帯が開発されるとペルーへ、アルゼンチンからの家畜の輸入が始まるとアルゼンチンへ、平気で国境を越えて出ていく。「こうした生活様式に慣れ親しむことで、彼らは文字どおり遊牧民となり、一カ所にじっとすることなく、主人も親方も認めない」(Beranilla 1871, p. 364)。

家族ともども農場に住みこみ、地主の下で働くインキリーノ。彼らは、「実直」で、「働きの者」で、「慎

ましく、「忠実」で、信心深い。これに対して、ペオンは決まった仕事も家庭もなく、教育とモラルを欠き、怠惰で、少しでも高い賃金を求めて浮浪生活を送る存在である。ペオンはエリートの規範や価値観とは無縁であり、エリートが支配する社会秩序の内部に取りこまれていない。「主人も親方も認め」ないこれらペオンはエリートにとって脅威であった(高橋一八九八年)。

すてに見たように、一八四〇年代以降、農村からの人口流入によってサンティアゴの人口は増大していくが、この流入人口の多数を占めていたのがペオンである。彼らは市外区にランチョを建てて住みこみ、日雇労働者として建設工事の現場で働いたり、物売りや雑業に従事したりして日銭を稼ぎ、休日にはチンガーナ(酒場)で楽しんだ。彼らこそ、ビクーニャ・マケナのいう「汚染、悪徳、犯罪、害毒の巨大な排泄溝」たる「市外区」の主要な住民だったのである。

また富裕層の邸宅で家事使用人として雇われて働いていた者も、その大半は農村から流入してきたペオンだった。一八七〇年代初頭、「エル・フェロカルル」紙は、「農村からやってきた労働者」たるこれらペオンが「都市文明社会」を「野蛮化している」としてつぎのように述べている。

「都市の召使いはすべて彼ら(ペオン)からなっており、彼らを自分たちの家に引き入れることでわれわれは野蛮さをも引き入れているのである。子どもたちは、彼らの言葉遣いや、秩序・清掃・モラルの欠如を学び、そのことをわれわれは一生悔やむことになる。わが都市文明社会がよい影響を与えることで彼ら労働者の状況を改善するはずであった。しかし確実にこれとは反対のことが起きている。彼らは都市を野蛮化しており、都市のほうはいえは彼らを文明化するような人びとを彼らのあいだに送りこんではいない」(El Ferrocarril 一八七一年七月一三日)。

#### 職人

都市においてペオンと対照的な存在であったのが職人である。仕立屋、靴屋、革なめし職人、ガラス職人、大工、鍛冶屋、パン職人、塗装職人、宝石細工師など、彼らは植民地時代から都市に住宅と仕事場をもち、都市住民向けの生産と販売を行ってきた。熟練度や身分(親方か徒弟)、財産の大小などの点で個々の職人のあいだにかなりの格差があったことは確かである。しかし少なからぬ数の職人が選挙権をもち、名実ともに都市社会の正式な構成員であり市民であった。一八六二年の時点で、有権者一二六二〇人のうちで職人は三七三四人と三割近くを占めており、けつして無視できない存在であった(Valenzuela 1985, p. 59)。当時の新聞でも職人の名前の前には敬称の「ド(Don)」が付けられている。

一九世紀中葉の時点で職人の平均収入は都市ペオンの賃金の三倍ほどであり、両者のあいだに極端な経済的格差があったわけではない。しかし職人とペオンとのあいだには外見や生活習慣の点ではっきりとした文化的な違いがあった。一九世紀中葉にチリを訪れた米国人のギリスは、日雇労働者や物売りなどのペオンが薄汚れた粗末な身なりであるのとは対照的に、職人や商店主はたとえ生活が苦しくても公の場ではきちんとした服装をするように努めているとつぎのように述べている。

「外国人は、上質の布地のコートに身を包み、絹の服と宝石で装った女性をエスコートしている目の前の男性が、その社会階梯の上で占めている地位では、せいぜいブリキ職人か大工、あるいは一辺五フィートの箱に入ってしまう程度度の木綿の服や小間物の商品在庫をもつ商店主にすぎないなどとは思ってもよらぬであろう。彼らは何としても素敵な服や上質の家具を手に入れようと、休日には劇場に出かけていく。しかしその生活はつねに困難の極みにあるのだ」(Gilliss 1855, p. 219)。

職人自身も自分たちがペオンとは異なる階級に属するとの意識がきわめて強かった。サルミエントは「職人をロトと呼ぶのは侮辱である」と書いているし、(El Progreso 一八四二年二月一九日)、一八二〇年代にチリを訪れたスウェーデン人の Bladh は旅行記のなかで、「職人や店員はペオンを前にして肩をすばめる」と書き記している (Bladh 1851, p. 180)。

4

## 「社会問題」の構図

### オレゴ・ルコの「社会問題」論

一八七〇年代、増大する都市下層民(ペオン)に対してエリートが危機感を感じていたことはすでに見た。その危機感は、下層民の居住地区が病氣、火事、犯罪の発生源になることへの恐れから主としてきていた。だが一八八〇年代になると、ペオンの増大を社会体制の存続そのものにかかわる脅威と見る見解が生まれてくる。知識人で政治家の アウグスト・オレゴ・ルコが八四年に発表した評論「社会問題」がその代表的な例である。

一九世紀、ヨーロッパ諸国では、資本主義の発展と都市化の進行にともなって都市にプロレタリアート(貧乏労働者)が集積し、貧困、失業、低賃金、劣悪な労働条件、住宅問題、衛生問題が深刻化した。また社会主義思想が広がり、ストライキやデモなどの労働争議も増大した。これら一連の問題は「社会問題」として把握され、その解決をはかるための社会政策が登場してくる。ヨーロッパより若干遅れるが、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての時期、ラテンアメリカでも「社会問題」をめぐる議論が活発に展開された。オレゴ・ルコの議論はその先駆けといえるが、ただ彼の考えた「社会問題」の中身はいささか特異なものだった。

オレゴ・ルコが「脅威となる、危険な社会問題」と呼ぶのは、「危険な大衆」である「プロレタリアート」がわれわれの目前で形成されつつある」という現実である。もしも事態がこのまま進行すれば、「われわれは不確実で不安に満ちた状況に陥ることとなり、その結果、商業活動は不可能となり、社会は混乱に陥る恐れにさらされることとなる」。「プロレタリアート」の増加が社会の存続を危険に陥れる。これがオレゴ・ルコの抱いた危機感だった。

ここで注意すべきなのは、彼が「プロレタリアート」と呼んでいるのが近代的な意味での賃金労働者ではなく、ほかでもないあのペオンのことだったということである。大地主が土地を独占的に所有しているがゆえに、インキリーノの子どもたちは成人するや家を離れ、仕事を求めて放浪せざるをえない。彼らペオンは「定住することなく、家族や家庭をもたず、社会的な絆を欠いて」いる。彼らは「通常の階級システムからはみ出た、孤立して無産の残余物」であり、「非組織的で、アトム化された大衆」である。ペオンは社会規範に無縁の存在であるがゆえに「危険な大衆」である。予兆はすでにあらわれている。「社会解体をめざす教義」(社会主義思想)が広がりを見せ、サンティアゴの貧民地区は公権力に挑み、農村では匪賊が跋扈している。

こうした状況を前にしてオレゴ・ルコが提言するのは、浮動する無定型のペオン大衆を安定した仕事につけて「社会階級」として定着させること、つまり社会秩序に統合し組み入れることである。そ

れにはレッセフェール（自由放任主義）では無力である。外国製品に対して門戸を完全に閉ざす民族産業の「無分別な保護」は論外だが、しかし保護は必要である。民族産業を保護して発展させ、ペオンを工場労働者として定着させる必要がある。そして彼らに義務教育を施し、また衛生の原則を教え、種痘を義務化する。さらに病院の拡充など社会的慈善の体制を改善する。

このように、もともと近代的なプロレタリアート（大工場で働く貧窮労働者）の増大と集積にともなう諸問題が「社会問題」とされたヨーロッパ諸国とは異なり、資本主義がまだ未成熟であった一九世紀末のチリにおいては、無定型のペオン大衆の増大が「社会問題」とされ、このペオンを近代的なプロレタリアートへとつくりかえていくことが問題解決の道として提示されたのである。

#### 一九〇五年の都市暴動

二〇世紀に入っても、ペオンを「危険な大衆」と見なし、これを「市民」である手工業者と区別する視線はかわることがなかった。そのことは一九〇五年にサンティアゴで起こった都市騒擾事件でも確認できる。

事件の発端となったのは、同年一月二日の日曜日、数万人の労働者と市民を集めて都心で開かれた大規模な集会である。この集会は、高騰する牛肉価格引き下げのためにアルゼンチン牛への輸入税の廃止を要求するものだった。集会を主催したのは、四〇以上の「労働者組織」(sociedad obrera) からなる連絡会議である。この「労働者組織」は大半が互助組合であり、その構成員の多くは塗装職人、印刷工、靴屋、ブリキ職人、配管工、タバストリー職人、大工、指物師、タバコ職人、馬具職人などの職人だった。

注意すべきは、この集会があくまでも政治秩序の枠内で行われたことである。主催団体は、集会が特定の政治的性格をもつことなく国民的利益を守るためのものであることを強調していたし、集会とデモが秩序正しく行われるよう細部にいたるまで事前に計画が決められていた。政府も軍も警察も集会に対して何の警戒感も抱いておらず、サンティアゴ駐屯軍は南部での演習に出かけて不在だったし、警察も一〇〇名の騎馬警官を警備に配置しただけだった。実際、当初、デモは整然と秩序正しく行われた。リエスコ大統領は私邸に代表を招き入れて要請書を自ら受け取り、食肉価格高騰に遺憾の意を表し、最大限の努力を払うことを約束した。

だがデモ行進の途中、大統領が会見を拒否したという流言が広がったのをきっかけにデモは暴動化した。暴動は三日間にわたってつづき、駐屯軍が演習からもどった二四日午後になってようやく沈静化した。死者二五〇人、負傷者五〇〇人、逮捕者八〇〇人を出す結果となった。この日の集会とデモには、職人のみならず、市周辺部の貧民地区から多数の下層民が参加していた。逮捕者の記録からみて、暴動において積極的な役割を果たしたのもこれら下層民であった可能性がきわめて高い。

興味深いのは、事件に関する新聞報道の論調である。どの新聞も一致して、「健全で勤勉で働き者の「真の労働者階級」と、「社会の下層をなす有害分子」「一群の浮浪者たち」とを明確に区別していた。集会は、長い伝統と「高い文化水準」をもつ「責任ある労働者組織」によって開催されたが、「不幸なことに、どの大都市にも存在する無名の分子がこの運動に合流して暴動化した」というのが共通の認識だったのである。

「ラス・ウルティマス・ノティシアス」紙はこの「労働者」と「浮浪者」の対比をきわめて鮮明に描いている。同紙によれば、一月二日の事件には「二つの異なった運動が存在していた」。一つは税

の撤廃を要求する労働者組織のデモである。彼ら労働者たちは「自分の家庭、貯蓄、そして多くの場合、財産をもって」おり、また「肉を食べ、税金の重さを感じている」。もう一つの運動は、略奪、盗みだけが目的の「民衆最下層のクズによる騒乱、反乱」である。経済が好況で、サンティアゴでは何百もの建設工事や事業が行われており、「そこで支払われる高い賃金が、文盲でどんなことでもやりかねない冒険的な移動ペオンを「サンティアゴに」引きつけた」。彼ら「群集は税や肉や権利のことなど何一つ知らず、失うものも得るものもなにひとつもっていない」。彼ら「犯罪者の群れは肉も税も知らない」のである (Las Ulmus Noticias 一九〇五年一月二四日)。

家庭と財産をもち市民として社会に統合された「労働者＝職人」と、社会からはみ出した浮浪者・犯罪者のペオン。この区分が二〇世紀に入ってもなお見られたことに注意しよう。

だが他方で、こうした区分の構図が徐々に変化していったことも事実である。

## 5

### 排除から統合へ「近代的労働者の形成とポピュリズム」

第一の変化は下層民「ロト」像の変容である。

一九世紀末、チリはペルー・ボリビアとの太平洋戦争(一八七九年〜八三年)に勝利し、アタカマ砂漠の豊かな硝石資源を獲得して、その後の経済繁栄の基礎を築いた。この戦争では多数のペオンが徴兵に応じ、勇猛な兵士として数々の戦功をたてた。ペオン(＝ロト)はいまや国民的英雄として称賛の

対象となり、サンティアゴのジュンガイ広場にはロトの戦功を称える記念碑も建設された。そうしたなか、作家のビクローニヤ・シユベルカソウのように、「世界でもっともすぐれた兵士」であるとしてロトをチリの国民的シンボルとしようとする動きすら生まれてくる (Solberg 1970, pp. 158-159)。

一九世紀末、ラテンアメリカ各国ではそれまでの急激なヨーロッパ化への反動からナシヨナリズムが芽生え、自国の「土着的価値」や「伝統」への関心が強まっていた。たとえばアルゼンチンで牧童ガウチヨが、またベネズエラで牧童リヤネーロが国民的シンボルに仕立て上げられていったことはよく知られている。だがチリのロトの場合には、記念碑のロト像がまるでギリシヤ神話のアポロ神のようだったように、現実と理想像との落差があまりに大きすぎた。ちょうど過去のインディオ文明をナシヨナリズムの中核に据えたメキシコにおいて生身のインディオは蔑視と差別の対象でありつづけたように、現実のロトすなわちペオンはいかかわらず見下される存在にとどまり、ロトがチリの国民的シンボルになることはついになかった。しかし他方で、それまで非市民と見なされてきたペオンが国民化の対象とされていく端緒となったことも事実だった。

もうひとつの変化は「労働者(オブレロ)」の多様化である。

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてチリ社会は大きく変化していく。太平洋戦争でチリが獲得した硝石資源は肥料あるいは火薬の原料としてヨーロッパ諸国に輸出され、チリに莫大な富をもたらしただけでなく、硝石産業(硝石の採掘・運搬・精製)を基軸に産業構造の多角化が進んだ。一般にラテンアメリカの鉱山業は国内経済への波及効果をもたないエンクレーブ(飛び地)経済と見なされることが多く、また工業化についても、一九二九年大恐慌以降に輸入代替工業化の形ではじめて開始されると

されてきた。しかし現実には、一九世紀末以降、チリでは硝石産業を基軸にさまざまな関連部門が発展し、それにともなつて鉄道・港湾などの輸送関連部門だけでなく、これら部門に資材を供給する製造業部門(車輛製造・修理工場、精練工場)も発展をみせ、さらに製糖業・繊維業・縫製業・醸造業などの消費財生産部門においても工場生産が拡大していった。

こうした産業構造の多角化は賃金労働者の増大を引き起こした。硝石の採掘と運搬、あるいは硝石精錬所で働く労働者に加えて、鉄道労働者や港湾労働者、さらにはさまざまな工場で働く賃金労働者が形成されていく。これら賃金労働者の社会的出自についての実証研究はほとんどない。だが硝石労働者の場合にはペオンが、製造業部門の工場労働者の場合には没落した職人が主だったと考えてはば間違ひなからう。オレゴ・ルコが望んだように、ペオンが定着化し社会階級として固定化される過程が部分的にはあれ進行していったのである。だが彼の思惑とは異なり、賃金労働者の増大・集積に起因する新たな社会紛争が発生しはじめる。賃上げや労働条件改善を求めるストライキなどの労働運動の勃興である。そしてこれら賃金労働者のあいだには、社会秩序の全面的な変革をめざすアナキズム、マルクス主義の思想がしだいに影響力を広げていく。

いまや、社会秩序の内部に統合された職人と社会秩序の外部に位置するペオン、という従来の構図は崩れはじめた。増大する賃金労働者をいかに統御して社会秩序の枠内に組みこんでいくのかという新たな課題が支配層の前に立ちあらわれてきたのである。この課題にこたえて生まれてくるのが、ラテンアメリカ現代史においてポピュリズムと呼ばれる現象であった。

周知のように、二〇世紀前半、ラテンアメリカ諸国の多くで、ペロン(アルゼンチン)、ヴァルガス(ブラジル)、カルデナス(メキシコ)に代表されるポピュリズム政治家が賃金労働者の統合に成功した。チリにおいても、北部の鉱山労働者を「私の群衆」と呼びその支持をえたアレサンドリが一九二〇年に政権につき、労働法制定をつうじて労働運動を制度化することで賃金労働者を社会秩序内部に統合しようとして試みた。この試みは保守派の抵抗にあつて挫折したが、アレサンドリの後を受けて軍人のイバニエスが政治の実権を握ると、「総力戦」の観点にたった国家改造構想を打ち出し、その一環として賃金労働者の組織化と国家によるコントロールをめざして統制色のきわめて強い労働法を制定した。

しかし労働法の公布直後イバニエスは失脚し、彼の国家改造構想は実を結ぶことなく終わった。その後の過程について詳説する余裕はないが、チリの賃金労働者とその運動は、労働法によつて制度化の回路に導き入れられながらも、最終的に、ポピュリズム政治家や国家の統制下に入ることなく、ラテンアメリカにおいては例外的に社会党・共産党の二大左翼政党の影響下におかれることとなる。

とはいえずすべてのペオンが賃金労働者化し、労働組合に組織化されていったわけではない。少なからぬ部分が日雇労働者や都市雑業層の地位にとどまることとなったからである。こうして組織労働者と貧民という新たな区分が生まれた。

注目すべきことは、左翼の労働運動指導者もまた両者を差別的に見ていたことである。硝石労働者を中核とする戦闘的な労働運動を組織しチリ共産党を創設したレカバレン(二八七六―一九二四)は、チリの民衆を「ある程度の進歩を実現してきた」グループと「なら目立った進歩をしていない」二つのグループに区分している。第一のグループに属している「労働者」(obrero)は「新しい組織、すなわち援助、貯蓄、搾取に対する抵抗、教育、レクリエーションのための協会をつくり、民主党という民

衆政党をつくった」。だが彼らは少数であり、大部分の民衆は「社会の最底辺の階級」からなっている。具体的には「ガニヤン、日雇労働者、農村ペオン、荷車引きなど」である。これら最底辺の民衆に対するレカバルンの言葉はきわめて厳しい。彼らはモラルを欠き、悪癖に染まっており、犯罪的である。彼らは「物質的にも精神的にも」「社会でも」とも貧しい階級である」(Recabarren [1910] 1976, pp. 68-71)。

一九三〇年代、四〇年代をつうじて、チリの左翼勢力は社会党、共産党を問わず、賃金労働者を「労働者階級」(clase obrera)と呼び、変革の中心的な担い手として重視する一方、都市下層民はしばしば「ルンペン・プロレタリアート」と軽蔑的に呼ばれて放置された。都市下層民が「ポブラドールズ」と呼ばれる新たな社会運動の主体として登場してくるのは一九五〇年代のことである。

### ●参考文献

- Bladth, C. E., 1951, "La República de Chile, 1821-1828", *Revista Chilena de Historia y Geografía*, Núm. 117 (enero-junio).
- Bezanilla, Domingo, 1871, "La Emigración", *Boletín de la Sociedad Nacional de Agricultura*, Vol. 2, Núm. 21 (15 de agosto).
- De la Barra, Miguel, 1846, *Memoria que el Intendente de Santiago presenta al Supremo Gobierno*

411

*sobre el estado de la Provincia de su mando, Santiago*: Imprenta del Progreso.

- Gilliss, J. M., 1855, *The U. S. Naval Astronomical expedition to the Southern Hemisphere during the years 1849-50-51-52*, Washington: A. O. P. Nicholson, Printer.
- Graham, Maria, 1988, *Diario de mi residencia en Chile en 1822*, Buenos Aires: Editorial Antártica.
- Orrego Vicuña, Eugenio, 1951, *Vicuña Mackenna, vida y trabajos*, tercera edición, Santiago: Zig-Zag.
- Recabarren, Luis Emilio, [1910] 1976, "Ricos y pobres", *Obras*, La Habana: Casa de las Américas.
- Sarmiento, Domingo Faustino, 1842, "Sociedad de industria y poblacion. Artículo IV y V: Santiago", *El Progreso* (Diciembre 19 y 22)
- Solberg, Carl, 1970, *Immigration and nationalism: Argentina and Chile 1890-1914*, Austin: The University of Texas Press.
- 高橋正明 「アジエンバの革命」、『第三世界の挑戦』(講座世界史 10) 東京大学出版会、一九九六年。
- 「一九世紀チリ・エリートの大衆観—ペオンの国外流出を中心に」『文部省特定研究報告』一九九八年
- (No. 22) 『ポスターコロリアル状況における地域研究』(2) 東京外国語大学海外事情研究所。
- Tornero, Recaredo S., 1872, *Chile ilustrado: guía descriptiva del territorio de Chile, de las capitales de provincia, de los puertos principales*, Valparaiso: Librerías i Oficinas del Mercurio.
- Valenzuela, J. Samuel, 1985, *Democratización vía reforma: la expansión del sufragio en Chile*, Buenos Aires: Ediciones del Ides.

Vicuña Mackenna, Benjamín, 1872, *La transformación de Santiago: notas e indicaciones a la Ilustre Municipalidad, al Supremo Gobierno y al Congreso Nacional, por el Intendente de Santiago*, Santiago: Imprenta de la Librería del Mercurio.

——— 1873, *Un año en la Intendencia de Santiago: lo que es la capital i lo que debería ser*, Santiago: Imprenta de la Librería del Mercurio.

### 競争社会のなかで新たな民衆連帯とは

高橋正明

数年前、南米チリの首都サンティアゴで二年間の研究生活を送る機会があった。四年ぶりに訪れたサンティアゴの街と社会は驚くほどの様相を変えていた。経済がすこぶる好調と聞いてはいたが、実際、見慣れぬ高層建築が街のあちこちに出現しており、いたるところでビルが建設中で、街の変貌ぶりは予想をはるかに越えていた。

こうした建設ラッシュは都心や高級住宅地に限らない。市の東南部にロ・エルミータという名前のポブラシオンがある。ポブラシオンとはもともと「団地」というほどの意味だが、チリではもっぱら下層民の居住地区を指す。ロ・エルミータはかなり大規模のよく知られたポブラシオンで、一〇年ほど前に日本でも公開されて評判になった記録映画「一〇〇人の子供たちが列車を待っている」の舞台にもなったところである。以前、僕も、

何人かの女性とのインタビュー調査のためによく通った。

幹線道路アメリカ・ベスプシオからロ・エルミータに折れて入る交差点の一角はかつて広い空き地だったところで、以前はトラックの運転手や仕事のない男たちがたむろしていた。今回、再訪して驚いたのは、この殺風景な空き地が巨大な近代的スーパーに生まれかわっていたことだ。うらぶれた雰囲気だったあたり一帯もきれいな商店が建ち並んでいて、すっかり表情を変えていた。

ロ・エルミータの知り合いの家の様子も変化していた。家周りが以前よりきれいになっていただけでなく、室内も新調の家具が増えていた。前よりも生活水準が上がっていることは確かだった。



ホブラシオンの女性たちがつづったアルビジェーラ「共同鍋」。